

第4節 縄文晩期刻目突帯文土器系の甕（深鉢）形土器について

今回の大野原台地の先史時代の遺物で注目されるのは、駒方B遺跡出土の埋葬に使用されたと思われる土器がある。器種は全て甕（深鉢）形土器で、浅鉢形土器あるいは壺形土器は出土していない。このため時期を決定するためには、他の地域の類似資料との対比を行なう必要がある。

まず、駒方B遺跡出土の資料の器形の共通点であるが、いずれも胴部で屈曲し、口縁部は内傾あるいは直口気味に立つ。さらに、胴部の屈曲部外面に1条、口縁部外面にも1～2条の刻目突帯文がめぐる。器面の調整は無で仕上げと思われ、特別な器具による調整痕はみられない。このような器形、文様を持つ土器としては縄文時代最終末期の夜臼式土器がある。そこで、大分県の夜臼式土器の単純遺跡である挾間町下黒野遺跡出土の甕形土器^{註1}と比較する。下黒野遺跡の甕形土器は、胴部の屈曲部が駒方B遺跡のそれよりも上位にある。また器面には横方向の貝殻条痕文がみられる。このように夜臼式土器と比較した場合、駒方B遺跡の甕形土器は様子が異なり、ただちに同時期というわけにはいかない。

そこで、大野川流域の同様な墓地遺跡である竹田市小高野遺跡の土器と比較する^{註2}。小高野遺跡の甕形土器は、駒方B遺跡出土のそれと器形や胎土は極めてよく似ている。ただ異なるのは、口縁部と胴部をめぐる突帯文を斜格子状や鋸歯状に突帯で繋ぐ文様が目立つことである。また、この遺跡からは、大野川中・上流域では珍しい壺形土器が出土している。これは口縁部が肥厚し、頸部と胴部の境界に浅い沈線もみられる。また胎土も甕形土器が暗茶色を呈するのに対し黄茶色である。この土器を北部九州の壺形土器と比較すれば、口縁部の特徴などから弥生前期後半に編年されている板付Ⅱ式土器に比定できる。出土状況も埋葬遺跡という性格のためか、甕形土器に大きな時期差は認められず、しかも小高野遺跡の出土遺物の中には、縄文晩期前半の遺物があるものの弥生前期のまとまった資料はなく、この壺形土器は駒方B遺跡出土の土器と類似する甕形土器と同時期と考えられる。

さらに、追加資料として久住町内畑遺跡の資料がある^{註3}。この遺跡は水系的には大分川流域になるが、大野川水系と近接し、しかも地形的に類似しているため、同一地域として把握することができる。出土土器は少ないが生活遺跡のためかバラエティは富む。大小の壺形土器、北部九州系の胴部に縦方向の刷毛目のある甕形土器、それに、駒方B遺跡・小高野遺跡で埋葬用の土器として出土した、調整痕のない、厚手で胴部の屈曲部に刻目のある暗茶色をした甕形土器の破片がみられる。

これらの土器を検討してみると、壺形土器は口縁部の単純な外反胴部と頸部の境に明瞭に沈線や小さな段がみられるなど、小高野遺跡の壺形土器より若干古式の様相をもつ。しかし北部九州系の甕形土器をみると、如意状口縁のそれは、口縁部下端に刻目があり、いわゆる板付Ⅱ式土器として認知されうるものである。内畑遺跡の資料は、県立三重農業高校久住分校の牛舎建設の際出土したものであるが、弥生時代前期の直前あるいは直後の遺物は出土しておらず、小高野遺跡とほぼ同時期である弥生前期後半と考えてもさしつかえないものと思われる。

こうしてみると、駒方B遺跡出土の甕（深鉢）形土器は、弥生時代前期後半として理解して間違

いないものであろう。

駒方B遺跡の甕（深鉢）形土器が弥生前期後半とした場合、次に問題になるのは、大野川上・中流域での縄文時代から弥生時代への移行の問題である。大野川上・中流域を中心とする地域の縄文時代から弥生時代にかけてこれまで理解されていた様相は縄文晩期前半に多くの遺跡が認められるものの、晩期後半にはその数も減少し、弥生時代前期の遺跡は皆無という状況であった。そして中期に再び遺跡が目立ちはじめ、後期中葉から後半にかけて爆発的に増加し、再び縄文晩期前半のような状況になる。駒方B遺跡・小高野遺跡・内畑遺跡出土の資料は、こうした空白の時期を埋める良好な資料である。

この時期の出来事として重要なことは北部九州への稲作の伝播である。縄文晩期の突帯文土器の時期にはすでに北部九州に本格的な土木技術や大陸系磨製石器を伴う稲作が伝播していることは佐賀県唐津市菜畑遺跡^{註4}や、福岡市板付遺跡^{註5}の水田跡の調査で明らかになっている。この稲作の大部分へ^{註6}の伝播状況をみると、弥生時代前期後半には伝播しているようである。たとえば宇佐平野の宇佐市台ノ原遺跡^{註6}、日田盆地の日田市吹上遺跡^{註7}、安心院盆地の宇佐郡安心院町宮ノ原遺跡^{註8}。大分平野では大分市雄城台遺跡^{註9}がその代表的遺跡で稲作と直接関係する大陸系磨製石器である石庖丁や扁平片刃石斧が板付Ⅱ式土器に伴い出土している。

大野川上・上流域における縄文時代晩期から、弥生時代前期にかけての遺跡の増減は、この出来事に呼応するように変化している。しかも、先にあげた板付Ⅱ式土器と石庖丁を出土する宇佐平野や内陸盆地、大分平野などの沖積平野の発達した地域には、縄文晩期の遺跡が大野川流域に比較すると極めて少ない地域であり、稲作の伝播とともに遺跡の出現する地域とも言える。

そこで、大野川上・中流域での縄文時代末期から弥生時代前期の空白な時期は、大野川流域から沖積平野へと、直接的あるいは間接的な人間の移動があったことも十分考えられる。そして、弥生時代中期から再び遺跡が目立ちはじめ、後期に爆発的に増加するのは、この新しい栽培技術や植物によるためと考えられる。

しかし、一方で駒方B遺跡や小高野遺跡などのように縄文時代の刻目突帯文土器の伝統を強く残す土器もある。この地域は、縄文後半から晩期前半にかけて、九州でも熊本県の菊池台地、長崎県島原半島と並んで遺跡の急激な増加がある。しかも、出土する石器は扁平打製石斧や石皿などで、極めて植物食依存度の強い様相を示している。賀川光夫が原始的な焼畑農耕の存在を問うている地域でもある。駒方B遺跡や小高野遺跡の甕形土器の存在は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての急激な社会変化があってもなお、この地域にとどまった人々の残したものと理解され、空白と考えられた時期でも無住の地ではなかったことを示している。なお、駒方B遺跡や小高野遺跡でみられた。甕形土器による覆甕棺方法の墓制は、北部九州で弥生前期後半からみられる甕棺葬とは甕の大きさや埋置方法を異にする。その伝統は縄文時代に求めなければならないがこの地域の縄文時代のそれは、竹田市ネギノ遺跡^{註10}、朝地町田村遺跡^{註11}でみられるように合せ口もある。また単棺による甕棺も長崎県山ノ寺梶木遺跡^{註12}、熊本県城・下原遺跡などで確認されており、島原半島から菊池台地、大

野川中・上流域とかつて縄文晩期遺跡の多かった中部九州に多くみられる。^{註13}しかし、まだ覆甕単棺の例は少なく、この方法による葬制は、この地域のこの時期だけの特殊なものか否かは、今後の検討が必要であろう。

ところで、縄文晩期の刻目突帯文土器のその後の展開であるが、今日までにその系統は弥生土器の甕形土器の中にみられる。西北九州を中心に分布する亀ノ甲式土器、東九州を中心に分布する下城式土器がそれである。^{註14}ところが駒方B遺跡などで出土した甕形土器の器形は胴部が屈曲し、器面調整に刷毛目を使用しないなどの点からみれば、亀ノ甲式や下城式土器より、さらに、刻目突帯文の特徴を強く残すものである。しかも、これら3タイプの甕形土器は、弥生時代前期後半から中期初頭にかけてほぼ同時に存在するものである。そこで九州の中部以北では、従来考えられていた、亀ノ甲式土器、下城式土器の分布圏に狭まれるように、阿蘇・久住連山を中心とした内陸部により刻目突帯文土器の伝統を強く残す甕形土器を用いる地域があったことが想定される。

次に、亀ノ甲式土器、下城式土器、および駒方B遺跡などで出土した刻目突帯文土器の展開を考えてみる。

亀ノ甲式土器は、弥生時代前期末から中期初頭に福岡県八女地方から北部九州にかけてみられる土器で、板付Ⅱ式土器などの如意状口縁の甕形土器と一諸に出土する。そして、それ以降になると、みられなくなる。刻目突帯文の土器の伝統を引くものの、弥生中期初頭で姿を消す土器である。

下城式土器の最古式の土器は大分県でも海岸部や県北部に多くみられる。宇佐平野の台ノ原遺跡、安心院盆地の宮ノ原遺跡、大分平野の雄城台遺跡がその代表的な遺跡で板付Ⅱ式土器を伴い出土する。これらの遺跡で出土する下城式土器はいずれも亀ノ甲式土器と同じ弥生前期末である。しかし、下城式土器はその後、さらに形態変化をしながら中期まで残り、分布範囲も大野川の中流域まで広がる。一部では後期初頭まで、その存在の可能性が考えられる。

次に最も刻目突帯文土器の伝統を残す一群の甕形土器であるが、その分布の中心と思われる大野川上流域では、弥生後期後半に頸部から胴部にかけて工字状の突帯がめぐる甕形土器がある。この土器は九州の他の地域ではみられず、この地域だけの特殊な土器と言える。その祖形となるものは、下城式土器が考えられているが、^{註15}器面調整に刷毛目が見られず、器壁も厚い。弥生中期にこの地域にみられる下城式土器との器形や器面調整上の格差には大きいものがある。一方、駒方B遺跡や小高野遺跡出土の甕形土器と比較すれば、器形は大きく異なるが土器の胎土や器壁の厚さ、器面調整に刷毛目を残さない点など、類似点も多い。この土器が弥生中期から後期にかけて、他地方の影響や植物処理の変化などで形態変化し、弥生後期後半の工字状突帯文の甕形土器に続く可能性は十分考えられる。そうすれば、刻目突帯文土器の伝統は、弥生後期後半まで残ることになる。

以上のように、3地域に分布する刻目突帯文土器の展開をみれば、亀ノ甲式土器は弥生中期初頭、下城式土器は中期末、大野川中・上流域の甕形土器は後期後半で姿を消してしまうと言える。この刻目突帯文系土器消滅の時期差は、あたかも北部九州に最初に伝播する“弥生文化”とそれまで存

在した“縄文文化”との関係を象徴するように思われる。つまり、縄文時代末期に北部九州に伝播する水稲栽培を生産基盤とする新しい文化である“弥生文化”は、最初西北九州に広がり、次に東九州、そして最後には大野川上・中流域のような九州内陸部と広がる。それに従い亀ノ甲式土器・下城式土器・大野川上流域にみられる工字状突帯の甕形土器は、この“弥生文化”の浸透により消え去って行く“縄文文化”の名残りのひとつとも考えられないだろうか。

以上、大野川上・上流域の縄文時代晩期後半から弥生時代にかけて考えたわけである。現在駒方B遺跡・小高野遺跡・内畑遺跡など資料が増加しているが、まだ完全に埋めきれぬものでない。この地域の縄文時代から弥生時代にかけての移行期の遺跡の調査が待たれる。

- 註1. 清水宗昭・渋谷忠章「下黒野遺跡」大分県教育委員会 昭和49年
2. 昭和47年別府大学により調査され、現在整理中であるが、一部牧尾義則「大分県の縄文時代遺跡 一大野川流域一」（大分県史 先史篇Ⅰ）昭和58年に紹介されている。
3. 渋谷忠章・坂本嘉弘「久住町内畑遺跡出土の土器一弥生前期の豊後内陸部の様相一」（大分県地方史 第110号）大分県地方史研究会 昭和58年
4. 中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」（歴史公論 通巻74号）昭和57年
5. 山崎純男ほか「板付遺跡調査概報」（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集）福岡市教育委員会 昭和54年
6. 後藤宗俊ほか「台ノ原遺跡」（大分県文化財調査報告 第33輯）大分県教育委員会 昭和50年
7. 村上久和「吹上遺跡 I・II」日田市教育委員会 昭和55・56年
8. 坂本嘉弘「宮ノ原遺跡 1・2」安心院町教育委員会 昭和57・58年
9. 昭和46年以来7次にわたり大分県教育委員会により調査され、弥生前期の貯蔵穴をはじめ、多くの資料が出土している。現在、整理中である。
10. 賀川光夫「縄文時代のカメラ」（考古学ジャーナル 34・35・37）ニューサイエンス社 昭和43年
11. 古田正隆「山の寺梶木遺跡」（百人委員会埋蔵文化財報告 第1集）百人委員会刊 昭和48年
12. 倉原謙治ほか「城・下原遺跡」山鹿市教育委員会 昭和55年
13. 賀川光夫「西日本のカメラ一覽」（考古学論叢 2）別府大学考古学研究会 昭和49年
14. 小田富士雄「入門講座 弥生土器一九州2一」（考古学ジャーナル 77）ニューサイエンス社 昭和48年
15. 牧尾義則「菅生台地と周辺の遺跡 II」竹田市教育委員会 昭和52年の中の結語で鳥養孝好が述べており、高橋徹・高橋信武「荻台地の遺跡 IV」荻町教育委員会 昭和54年の中で、高橋徹がさらに具体的に論じている。